

機動戦士ガンダム～戦場の小唄～

モービルス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

機動戦士ガンダム2次創作のショートストーリー集。
ガンダムシリーズの脇役たちの話を短編で描きます。

要素は下記のとおり。

- ・ だいたい1〜2話構成の短編ストーリー
- ・ 宇宙世紀メイン
- ・ ジオン側だったり、連邦側だったり

さて、今日の戦場は・・・？

目次

第1話	北極基地のブラウン隊（前編）	1
第2話	北極基地のブラウン隊（後編）	9

第1話 北極基地のブラウン隊（前編）

窓の外は、真っ白で何も見えない。

外は息が詰まるほどの激しい雪と風が吹き荒れており、室内にいても凍えそうだ。

吐き出した息も白くなる。

彼の名は、キーン・ジャスパー。

地球連邦軍のモビルスーツパイロットである。

ただし、まだ実戦は経験したことのない、“新米”モビルスーツパイロットだ。

二十歳を過ぎたばかりの、顔立ちにまだ幼さの残る青年である。

軍に入ったばかりの新入生といった様相であり、軍服に“着られている感”が否めない。

白い肌、地毛であろう金髪、ブラウンカラーの瞳、そしてそばかす顔：彼の印象は、実際の年齢より幼く見える。

今、キーンは、地球連邦軍の戦術輸送機『ミデア』の中にいた。

ミデアは、地球連邦軍最北端の基地、北極基地へ向かっていた。

時々機体が傾き、キーンは転びそうになる。

（無事に基地へ辿り着けるのか…。基地に着く前に氷河へダイブなんて、冗談にもなってねえぞ…）

先日、キーンは地球連邦軍のモビルスーツパイロットの短期錬成過程をなんとか卒業し、晴れてモビルスーツ免許を取得した。

現在の地球圏の情勢は、地球連邦軍がオデッサ作戦で勝利を収め、地上のジオン軍は続々と地球から宇宙へ脱出しており、戦いの舞台は宇宙へと移行しつつある。

キーンの配属希望は、宇宙であった。人からは「生き急ぎ過ぎだ」とか「宇宙は危険だ」等と言われるが、若い軍人である彼にとって、壮大な宇宙というスケールの大きさは魅力的であった。

…が、配属先は地球の北極基地であった。

北極基地は最果ての基地と揶揄されており、左遷基地とも噂されていた。

初めての配属先がそんな基地であったので、モチベーションも急降下という訳だ。

自然と、深いため息が出る。憂鬱だ。

ミデアが北極基地に着陸する。

外に出ると雪と風が吹き荒れ、凍えるような寒さである。

気温は当然マイナスだ。

こんなところで自分は生きていけるのだろうか。

「キーン・ジャスパーク伍長、本日をもって北極基地に着任しました」

キーンが司令官室で着任の挨拶をする。

目の前に座っている男は、北極基地司令官ヘリー・ハンセン中佐である。

「やあキーンくん、長旅お疲れさん、私が基地司令のヘリー・ハンセン中佐だ。ま、そう固くならず、リラックスして聞いてくれ」

ヘリー・ハンセン中佐は、おそらく60手前くらいの年齢であり、穏やかな笑顔が印象的だ。およそ軍人らしさは感じられず、何とというか「昼行燈（ひるあんどん）」という言葉がしっくりくる。

「ここ北極基地は、基地中央のシャトルによる宇宙への物資輸送を主な任務としている。我が基地は、基地守備隊であるブラウン隊を有しており、モビルスーツはジム寒冷地仕様が配備されている。キーン伍長には、このブラウン隊に所属し、モビルスーツによる基地警備を担当してもらう。ま、こんな辺境の地にジオン軍はめったに来らんよ。仕事などの諸々の事は、隊長のゴッド・ブラウン大尉に聞いてくれ。これからよろしく頼むよ」

「よろしくお願いしますー」

キーンはビシッと敬礼をして、司令官室を後にした。

ブラウン隊の待機所は別棟にあるとのことだ。

キーンは別棟に向かう途中、モバイルスーツ格納庫に寄り道した。鉄とオイルの匂いで充満している格納庫：

キーンはこの匂いが嫌いではなかった。

格納庫の入口には、スパナやレンチといった諸々の整備道具が乱雑に置かれており、この風景も味があつて良い。

格納庫の奥には、6機の『ジム寒冷地仕様一年戦争時に地球連邦軍が量産したジムシリーズの内、「後期生産型」にあたる機体。寒冷地用として氷結対策、防寒処理が施されている。また荒天の続く寒冷地での生存性を確保するため、通信性能が強化されている。主に拠点防衛用として北極基地などの寒冷地に配備された。カラーリングは青みのある白とグレー。武器はフォアグリップ兼用マガジンを備えた寒冷地用マシンガン、グレネイド・ランチャー、ビーム・サーベルである。』が整列していた。

養成学校で操縦した『ジム』よりスリムな印象であり、ヘッドのデザインがカッコイイ。

武器もビームスプレーガンではなく、マシンガンであることも個人的に好印象だ。

早く操縦してみたい。

「ん？アンタ、見たことない面（ツラ）だな」

「ウワアッ！」

急に後ろから声を掛けられたのでビックリして声が上がらずにしまったキーン。

「ああ、スマンスマン、ワシは整備長のスタッグじや。基地の連中にはキャプテンスタッグとかスタッグじいさんとか呼ばれておる」

昼寝をしていた整備長のスタッグがキーンに気づき、声を掛けたのだ。

スタッグは70を過ぎた老人であるが、現在も現役で数名のスタッフと北極基地のモバイルスーツ整備を手掛けている。腰は曲がり、頭は禿げ上がっているが、目には力がこもっており、今なお情熱を持って生きていることが見てとれた。

「ここに勝手に格納庫に入つてスイマセンでした。本日付けで着

任しました、キーン・ジャスパー伍長です。ブラウン隊でジム寒冷地仕様の操縦を担当します」

「そうかそうか、ブラウン隊にな。モバイルスーツの整備は、このスタツグに任せてくれ！」

スタツグが親指を突き立てる。

「しかしモバイルスーツの状態が綺麗ですね。日頃の整備の賜物ですね」

「そうじゃろう！ワシもこの年になって、モバイルスーツの整備に関わるとは思ってもいなくてな。毎日が楽しいわい。何かあつたら、いつでも声をかけてくれ！」

「ありがとうございます。それでは隊員待機所に行つてきます」

「ああ、じゃあの」

モバイルスーツ格納庫をあとにし、隊員待機所にたどり着いた。

キーンはドキドキしながら待機所のドアを開ける。

「失礼します！本日付けで着任しました！キーン・ジャスパー伍長です！」

大声で挨拶したが、返ってくる声は無かった。

「よっしやテンパイ！リーチ!!」

「あら残念。リーチチートイドラドラ親満！」

「なんだよくっそ！またリンの一人浮きじゃねえかよ〜」

ブラウン隊の面々は、夢中で麻雀をしていた。

隊員の男女4人は麻雀をしており、隊長とおぼしき人は、隊長席の机に突っ伏している。

キーンが固まっていると、麻雀をやっていたガタイの良い男がキーンの存在に気付く。

「お前、もしかして今日から配属される新人か？」

「ハ…ハイ」

「隊長、ブラウン隊長！新人が来ましたぜ！」

机に突っ伏していた男が顔を上げる。やはりこの男が隊長であつ

た。

「また競馬中継ですかア〜」

「うるさいよ、お前らだっていつつも麻雀だろ。お互い様でしょ」
「いや、まあ、そうなんすけどね」

すぐに隊長がキーンに気づく。

「ああ、君がキーン・ジャスパー伍長だね。私は北極基地守備隊『ブラウン隊』の隊長、ゴッド・ブラウン大尉だ。ハイハイみんな注目〜新入生のキーン・ジャスパー伍長だ〜。仲良くしてやるんだぞ〜」

ブラウン隊長の掛け声とともに、隊員がぞろぞろと集まってきた。

「簡単に隊員たちの紹介をするよ。このガタイの良いバンドナの男はビリー・コールマン中尉だ。彼はブラウン隊のナンバー2だよ。」

「よろしくな」

ビリー・コールマン中尉が右手で握手を求める。

「よろしくお願いします」

キーンも右手を差し出す。

ガッチリと握手を交わす2人。

「イデデデデ!!」

ビリーの握力が強すぎたため、悶絶しそうになるキーン。

「ハハハッ」と呑気に笑うビリー。

「そこにいる水商売してそうなねーちゃんは、ブラウン隊の紅一点、リン・チャムス曹長だ。これでも正規の軍人だよ」

リン・チャムス曹長がキーンに「ハアーイ」と言いながら投げキッスをする。

どう反応していいか分からず、「ははは…」と笑うキーン。

「あとは、デブのスキンヘッドがロゴス軍曹、長髪の痩せたメガネがグレゴリー軍曹だ」

ロゴス軍曹とグレゴリー軍曹が無言で右手を上げる。

”これからよろしく”という意味なのだろう。

キーンもお辞儀をする。

この2人もキャラが濃ゆそうである。

「仕事や諸々の事は徐々に教えていくから、まずはこの基地のルール

について、先輩から教わってね。それじゃあ頼むよ、ビリー・コールマン中尉イ〜」

「えっ!? 俺っすか?」

「ブラウン隊のナンバー2でしよ〜」

「しよ、しよがねえなあ」

頭を掻きながら、ビリーがキーンに”ついてこい”と合図をする。

キーンは慌ててビリーについていく。

こんな不良みたいな人たちの中で、自分は上手くやっつけていけるのかとつくづく不安になるキーンなのであった。

キーン・ジヤスパー伍長着任から1週間が過ぎた。

当初の不安はどこへやら、キーンはブラウン隊にすっかり馴染んでいた。

ビリー・コールマン中尉は強面でぶつきらぼうだが、意外にも後輩の面倒見が良く、キーンの相談に乗ってくれたりする。

リン・チャムス曹長は見た目は派手だが、隊のみんなに料理を振る舞ったりと、家庭的な女性である。

ロゴス軍曹はアニメオタク、グレゴリー軍曹はモビルスーツオタクであり、キーンと話が合い、すぐに打ち解けた。

ブラウン隊長は適当な所もあるが、実はしっかりと隊員ひとりひとりを見ており、適材適所の役割を与え、隊が円滑に回っていることが分かった。

ブラウン隊について、キーンは最初、全く仕事をしない不良の集まりかと思っていた。だが実は、1日の仕事をすぐにこなし、余った時間は自分たちの好きなことをやるという体制が取れている部隊だったのだ。

今日も早めに仕事を切り上げ、隊員たちはそれぞれ趣味などに興じている。

また、隊員たちのモビルスーツ操縦技術もなかなかのものだった。

ビリー・コールマン中尉は格闘戦を得意としており、モビルスーツ模擬戦でキーンは何度倒されたか分からない。リン・チャムス曹長は射撃に長けており、射撃訓練では全ての的の中央に的中させていた。ロゴス軍曹とグレゴリー軍曹は連邦軍・ジオン軍両軍のモビルスーツ、さらには武器等の知識が豊富であり、この2人の知識は戦闘時に欠かせないであろう。ブラウン隊長は、モビルスーツ模擬戦では指揮を執っているので実際の操縦技術は不明だが、実戦経験は隊員の中で1番豊富だとビリー・コールマン中尉が語っていた。

以前、北極基地はジオン軍のアツガイジオン軍の水中航行能力を持つ水陸両用モビルスーツの一つ。排熱量の低さから熱センサーに感知されにくく、偵察任務にも従事する。また、ステルス性を重視しており、外装には電波や赤外線を吸収する塗料が塗られている。ズゴックジオン軍の水中航行能力を持つ水陸両用モビルスーツの一つ。水陸両用の傑作機として高い評価を得たものの、他モビルスーツとのパーツ互換がなく高騰したコストや癖のある操縦性など、問題点も少なからずあった。腕部アイアン・ネイルでジムの胴体を一撃で貫くシーンはあまりに有名。による襲撃を受けたが、ブラウン隊は敵を全機撃破し、こちらの損害は2機のモビルスーツが中破したのみであったとのことだ。

キーンの歓迎飲み会では、酔った隊員たちが戦いの様子を誇らしげに語っていた。

1日の仕事をこなした後、キーンは屋上で夕日を眺めていた。

北極海では曇りが多いが、今日は晴れており、夕日がとても綺麗だ。夜にはオーロラが見えることもある。

「よう、キーン」

ビリー・コールマン中尉が現れた。手には煙草が握られている。

「1日の終わりに夕日を見ながら煙草を吸う。人生、たぶんこんなもんでいいんだよ」

ビリーが、ハハハと笑いながら煙草に火をつける。

煙草の煙が、ゆっくりと上空に舞う。

「ビリーさん、俺も煙草、いいっすか？」

「えっ、キーンお前、吸ってたっけ」

「ビリーさんを見てたら、なんだか俺も吸いたくなりました」

「いいぜ、一本やるよ」

キーンが煙草を口にくわえ、ビリーがジツポライターを近づける。

「深く吸い込んで、吐き出すんだ」

キーンは勢い良く吸い込むが、そのせいでむせてしまった。

「ゴホッ、ゴホゴホッ！なんだよコレッ！」

「バツカ！勢い良く吸いすぎだ」

ビリーが腹を抱えて大笑いする。

「ま、これでお前も大人の仲間入りだな」

「大人って厳しいな」

「徐々に慣らしていくんだよ、何でもな」

今日も、北極基地のブラウン隊の日常が無事に終わるのだった。

この時の2人はまだ知る由もない。

2週間後、北米のオーガスタ基地から「あるトップシークレットの積荷」が北極基地に搬入されることを。

その積荷の情報をジオン軍がキャッチし、特務隊が北極基地襲撃を画策することを。

北極基地の穏やかな日常が、急に終わりを迎えることを。

第2話 北極基地のブラウン隊（後編）

「これが…ガンダムってやつか…」

ヘリー・ハンセン中佐は、北米のオーガスタ基地に来ていた。傍らには、ゴッド・ブラウン大尉もいる。

彼らの目の前に鎮座しているMSは、RX-78NT-1 コードネーム名「アレックス（ALEX）」、地球連邦軍の試作MSである。

あの、「RX-78-2 ガンダム」の発展機であるらしい。アレックスはサイド6の「リボロコロニー」まで輸送の後、地球連邦軍のニュータイプ部隊に手渡されるとのことだ。

このMSをオーガスタ基地から北極基地へ輸送し、北極基地からシャトルでサイド6まで運ぶというのが、ハンセン中佐とブラウン大尉の任務である。

今回の任務は極秘中の極秘ということであり、彼らは緊急でオーガスタ基地に呼ばれた。

アレックスからは何というか、神々しさのようなものが感じられる。

間違いなく、こいつは戦争の行方を左右する兵器の1つだ。

今回緊急で呼ばれたのは、ジオンによる情報のリークを、少しでも避けたいからだろう。

「…ということ、アレックスを解体の後、各パーツをコンテナに収納し、ミデアで北極基地へ輸送します。明後日の朝にはミデアが北極基地に到着するので、輸送用シャトルに迅速に搬入し、サイド6へ向けて打ち上げてください」

基地の担当者が必要事項を淡々と説明する。

担当者の目はどこか虚ろで、疲れが出ているのが見てとれる。

おそらく、今日まで寝る暇もなく、MSの試作・解析等の作業をしていたのだろう。

やれやれ…定年前にとんだ任務を受けてしまったものだ…

ヘリー・ハンセン中佐は、目の前のアレックスを見上げる。

まずは、基地の輸送班に大急ぎで指示をしなければ。

万が一に備えて、ブラウン隊がすぐに出撃出来る体制も整えなければいけない。

この任務は、定年前の大仕事になりそうだ。

キーン・ジャスパー伍長が北極基地へ着任し、約3週間の月日が流れた。

最初は慣れない環境での生活に戸惑うキーンであったが、今ではすっかり環境や仲間たちに馴染んでいた。

北極基地は、地球最北端に位置しており厳しい環境であるため、ジョン進行の手が届かず、敵の襲撃も滅多に無い。

したがって、基地守備隊であるブラウン隊はある程度の余裕を持ち、平穏な日々を送っていた。当初は意気込んでいたキーンであったが、平穏な日々慣れ、デスクワークに勤しんでいた。

今日もブラウン隊の隊員たちは、早めに業務を切り上げ、各々が好きなことをしていた。

「なあ、何かあるか？」

ヒマ過ぎて昼寝をしていたロゴス軍曹が、天井を見上げて目を閉じたまま向かいの席のグレゴリー軍曹に話しかける。

ロゴスはでつぷりと太っており、およそ軍人らしくない体型の持ち主である。おまけにスキンヘッド。

対するグレゴリーは長髪の痩せた黒縁メガネといった、こいつも軍人には到底見えない出で立ちだ。

「何かっていいいますと？」

グレゴリーがカタカタとパソコンのキーボードを打ちながら答える。

グレゴリーの目はパソコンの画面から全く離れない。おそらくインターネットの掲示板に書き込んでいるのだろう。彼には、ネットの

中に多数の友人がいる。現実の友人は少ないんだが。

「だから何か、ニュースはないかと聞いてるんだ」

「別に：特にないと思いますけど」

「お前はまくた書き込みか。よく飽きないもんだ。ニュースを見る」

「さつき見ましたよ」

「：で、何かあつたら？」

「特になにも。今日も北極基地は平和です」

「なんかあるだろ!!」

「ありませんてば：!!」

ロゴスとグレゴリーが立ち上がって対峙する。

「ここは最果ての地球連邦軍基地「北極基地」。

基地司令官は定年間近の昼行燈。

大規模な作戦・戦闘はまず無いし、飲食店や娯楽施設がある訳でもない。

基地と兵士宿舎を往復する毎日。

正直、こんな生活を毎日送っていたら気が狂いそうなのだ。

「どうしたんですか、2人とも」

キーン・ジャスパール伍長が、ビリー・コールマン中尉とともにタバコ休憩から帰ってきた。

無言で睨み合っているロゴスとグレゴリーに声を掛ける。

「なんでもない。ただ、恐ろしくヒマなだけだ」

ロゴスはそう言って椅子に座り、また目をつぶる。

「せっかくだがいい天気なんだ。もつと爽やかに生きようぜ」

ビリー・コールマン中尉がグレゴリーの肩をポンと叩く。

「いいんです。自分にはネットさえあれば事足りるんですよ…」

グレゴリーも自席に座り、またカタカタとキーボードを叩くのだった。

そして夕方。そろそろ就業時間なので、ブラウン隊は全員自席に座っていた。

ちなみにブラウン隊長は珍しく本日は出張であった。北米のオー

ガスタ基地に。

「そうだ思い出した、ありましたよ、話題」

ふいにグレゴリーが話し出す。

「なになにグレゴリー、話してみてよ」

お菓子を食べながら雑誌を眺めていたリン・チャムス曹長が反応する。

リンは軍服をだらしなく着込んでおり、胸の谷間が露出している。

さらにズボンではなくスカート、脚にはタイツを履いており、中々刺激的な身なりだ。

寒くないのだろうか。

「早く話せよ、グレゴリー」

ロゴスも催促する。

グレゴリーがリンの方はあまり直視せずに話し始める。

「スタッグじいさんから聞いたんですけどね、近日中に北米のオーガスタ基地から、”トップシークレットの積荷”が搬入されるらしいですよ。その積荷は、ここ北極基地からシャトルで宇宙のコロニーへ搬出されるそうです」

オーガスタ基地とは、北米に位置する地球連邦軍の基地であり、基地としての機能だけでは無く、モビルスーツの開発や研究を行う研究施設やニュータイプ研究のための研究所も併設されている。多岐に渡る研究が実施されており、パイロット用ノーマルスーツの研究やあの”ガンダム”が開発されているという噂まである。

「なんでじいさんがそんなこと知ってんだよ」とロゴス。

「さあ、何故でしょうね…」

「そういえば、ブラウン隊長はそのオーガスタ基地に昨日から出張ですわね」

キーンも会話に加わる。

「しかも基地司令と一緒に。これはなんだか怪しいな」

やることがないのでタバコを吸いながらリンの胸元を見ていたピリーも反応する。

「これはもしかして…例の話じゃないですかね？」

グレゴリーがニヤニヤしながらビリーに向かって話す。

「例の話って…あの話？」

ビリーがハツとする。

「北米のオーガスタ基地で、物凄い性能の”ガンダム”が開発されてるって整備スタッフの間ではもっぱらの噂ですからね…もしかするとですよ、まさかその積荷って”ガンダム”だったりして…」

「ただの噂なんじゃないの？」

「ま、噂でしか聞こえてきませんからね」

「ただの噂でデマかもしれないだろ」

「たしかに、ただのデマだって噂もありますね」

「どっちなんだよ」

「どっちなんですよ？」

グレゴリーとビリーがまるで示し合わせていたかのように交互に会話する。

「なにつ!!ガンダムだどつ!あのザクを100機撃破したとかいう伝説の…。俺が乗ってやろう!」

ロゴスがしゃしゃり出てくる。

「あんたにや無理だよロゴス。それならアタシが乗るっての」

リンもガンダムに興味があるようだ。

「えっ、ガンダム見えるんすか!それも新型の!!」

ガンダムと聞いてキーンも興奮している。

「いやいやみんな落ち着け、だからあくまで噂なんだってば!」

そんなこんなで、この日はおひらきになった。

ガンダムとは、地球連邦軍のホワイトベース隊に配備されているモビルスーツであり、一説によるとザクを100機以上撃破したとの戦果を誇る。

先のオデッサ作戦での地球連邦軍の勝利は、ガンダムの活躍無しでは難しかったとの意見もある。

一年戦争におけるガンダムの活躍は、連邦軍にとって希望の象徴であり、末端の兵士たちの戦意を大いに鼓舞する存在であった。

翌日、ブラウン隊長がオーガスタ基地から戻ってきた。

戻ってきたブラウン隊長は険しい表情をしており、その日のうちに会議室で緊急のミーティングが開かれた。

「みんな急なミーティングですまない。急なことだが明日、北米のオーガスタ基地からミデアが到着し、ある積荷が搬入される。その積荷は急ピッチでその日のうちにシャトルでサイド6のリボーコロニーへ打ち上げられる。シャトルへの積荷搬入作業の間、わがブラウン隊は作業の防衛にあたる必要がある。何が起こるか分からんからな」

ブラウン体調が淡々と説明する。その表情は相変わらず険しい。

「あのくその積荷の中身って何でしょうかね？」

ビリーが恐る恐る質問する。

「本当はトップシークレットだが、お前らには特別に教えてやろう。積荷の正体は、オーガスタ基地で開発されたニュータイプ専用のガンダムタイププロビルスーツだ。そのガンダムは、分解状態でコンテナに収められ搬入される予定だ。ガンダムと言えば物凄い戦果を誇る化け物。これ1機でこの戦争の戦局が変わるかもしれん。だからこそ、絶対に宇宙へ運ぶ必要がある」

ビリーとグレゴリーが驚いて顔を見合わせる。噂は真実であった。

他の隊員も驚いている。

ブラウン隊長が続けて話す。

「それとな、ガンダムの搬入作業中は臨戦態勢をとる必要がある。ガンダムの情報はジオン軍にリークされている可能性もある。ジオンの連中も、何としてもガンダムは撃破したいだろうからな」

隊員たちに緊張が走る。

キーンも不安でいっぱいの表情になる。

「大丈夫だキーン。今や多くのジオン軍は地球から宇宙に撤退している。そもそもこんな辺境の基地に戦力を使う余裕なんてないさ」

ビリーがキーンの頭にポンと手を置く。

そして、当日。

朝早くに北極基地へミデアが到着し、ガンダムのパーツが納められたコンテナが次々とシャトルへ搬入されている。

コンテナの搬入が終わり、シャトルが無事に発射されれば、本日のブラウン隊の任務は完了である。

ブラウン隊の6人はジム寒冷地仕様一年戦争時に地球連邦軍が量産したジムシリーズの内、「後期生産型」にあたる機体。寒冷地用として氷結対策、防寒処理が施されている。また荒天の続く寒冷地での生存性を確保するため、通信性能が強化されている。主に拠点防衛用として北極基地などの寒冷地に配備された。カラーリングは青みのある白とグレー。武器はフォアグリップ兼用マガジンを備えた寒冷地用マシンガン、グレネイド・ランチャー、ビーム・サーベルである。に乗り込み、それぞれ待機していた。

ロゴス、グレゴリー、リン、ブラウンは冰山側からの敵の侵入を警戒し、モビルスーツドックに待機していた。

ビリー、キーンは水陸両用モビルスーツの侵入を警戒し、潜水艦ドックに待機している。

モビルスーツドックにはロゴス、グレゴリー、リン、ブラウンの4機のジム寒冷地仕様が整列している。

この地下ドックから、モビルスーツ用エレベーターに乗り込み、ブラウン隊は出撃する。

「おいロゴス、聞いてるか？」

「何ですか、グレゴリー」

「このジム寒冷地仕様のよ、マシンガンの音がき、重低音で好きなんだよな」

「それ、完全に同意です。今日は珍しく意見が合いますね」

「お前ら、あんまり無駄話すんな。緊張感を持って」

ブラウン隊長が叱責する。

「もし敵がきたら、あんたらも少しは弾を当てなさいよ」

リンも部下に注意を促す。

「まあ、こつちにはブラウン隊長とチャムス曹長がいるから大丈夫でしよう」

「まずいのは、ビリー中尉とキーン伍長の方じゃないですか？いくらビリー中尉と言えど、新米とのコンビで大丈夫なんすかねえ…」

「あちらのことは、ビリーに全て任せることにするよ。それに、キーンだって確実に操縦の腕を上げているからな」

今回の戦闘配置は、ブラウン隊長が決めたものだ。

ブラウン隊長は部下のことをいつもよく見ている。

ビリーとキーンは潜水艦ドックに配置され、ビリーは妙な胸騒ぎを感じ、押し黙っていた。

「…おい、キーン」

急にビリーがキーンに話しかける。

「な、なんですか、ビリーさん」

「もし、何かあったら、お前はシャトルの方へへ行け」

「何かって…変なこと言わないでくださいよ」

「とにかく行け、いいな」

「はい…」

それは、突然のことだった。

北極基地の冰山側から、突如、ジオン軍水陸両用MSのゴッグタイプ機体名称：ハイゴッグ、型式番号：MSM-03C。一年戦争末期、ジオン公国軍が水陸両用モビルスーツMSM-03ゴッグを、根底から見直して開発した機体。脱着式ジェットパックによって、短時間で

あれば飛行することも可能となった。特徴は伸縮自在の腕であり、マニピュレーターにはビームガンの内蔵し、ハンドミサイルユニットを装着することもできる。陸戦性能を改善した結果、ハイゴッグは、連邦軍のジムを圧倒する機動性を獲得。ゴッグとはまったく別の機体と言えるほどの進化をとげた。が2機、飛び出した。

2機のMSは、飛び出すと同時に、腕部に備え付けられたロケット弾を発射し、北極基地の倉庫を爆撃する。

基地内では緊急警報が鳴り響く。

「ゴッグタイプ、2機による強襲！繰り返す！ゴッグタイプによる強襲！ブラウン隊は防衛ラインを張れ！輸送班は搬入作業を急げ！」

オペレーターが指示をする。まるで悲鳴を上げるかのように。

敵のMSは既に基地内に侵入している。

基地の隊員たちは、MSに蹂躪され、蟻のように逃げ惑っている。

ブラウン隊はすぐにモビルスーツ用エレベーターに乗り込んだ。

基地内のモビルスーツ用エレベーターは2門しかない。

まずは、ログスとグレゴリーが出撃した。

敵のMSは、ミデアや基地の倉庫を攻撃している。

やはり積荷を探しているようだ。

「ジオンめ……いつを食らいやがれ！」

ログスとグレゴリーが同時にマシンガンを連射する。

マシンガンの弾は敵に当たる……が、傷は浅い。

敵も反撃する。

敵の腕部ビームがグレゴリーを襲う。

ビームはジムの手首に正確に当たり、マシンガンは弾を発射したまま反転しジムに命中、なんとグレゴリーは自分の武装で自滅してしまった。グレゴリーが最後に見たのは、マシンガンの銃口であった。

グレゴリーのジムが情けなく倒れこむ。

リンはログスに合流する。

「クソがあ……よくもグレゴリーを!!」

ログスは逆上して頭に血が昇り、とにかくマシンガンを撃ちまくっている。

「ロゴス！落ち着け！」

リンはそう言いながらも、初めての仲間の死にパニック状態になり、こちらもマシンガンを撃ちまくる。

敵にはなかなか当たらない。

そして敵は、一瞬の隙を突き、ロゴスに突撃する。

ロゴスのジムは敵に頭を捕まれ、身動きが取れなくなる。

敵のパイロットは恐ろしい腕前だ。

操縦技術と状況判断力、パイロット、いや軍人としての能力を兼ね揃えている。

ベテラン中のベテランだろう。

錯乱したリンは、近接した敵にマシンガンを撃つが、敵はあろうことかロゴスのジムの盾にした。

マシンガンの弾はロゴスに当たり、リンは後ずさる。

敵はロゴスのジムのコックピットをビームで仕留める。

ロゴスは生きてはいないだろう。

建物の裏に逃げ込んだリンのジム。

「ハア：ハア：ヒュー、ヒューヒュー、ハア：ハア：」

あまりの衝撃に、リンは過呼吸の発作が出ていた。

もう、ダメだ、勝てっこない：

「おいリン！生きてるか!!」

ブラウン隊長が叫ぶ。ブラウン隊長も無事だったようだ。

リンはハツとして、落ち着きを取り戻す。

「相手はおそらくプロ中のプロだ。この数秒で一気に2機撃破しやがった：恐ろしい腕前だ。シャトルが発射するまであと数分、時間を稼ぐぞ」

やれやれ：こんな事態になるとはな：

俺の休暇も、長くはなかったな：

ブラウンは、2機の敵MSを睨みつける。

おそらくこれが”最後”のMS戦だな。

なんとか、シャトルだけは守らなければ。

同時刻、潜水艦ドックにもジオンの水陸両用MS2機が侵入していた。

1機は同じゴッグタイプだが、もう1機は新型のズゴックタイプ機体名称・ズゴックE（エクスペリエンス）、型式番号：MSM-07E。ズゴックの性能向上機で、水陸両用MSとしては一年戦争中最高クラスの完成度を持つ機体。武装は、腕部ビームカノン、頭部魚雷発射管、バイスクローである。だ。

ビリーとキーンは、物陰に隠れ、2機のMSの攻撃をなんとか凌いでいた。

まずいな…こちとら戦力はジム2機だ。

しかも1機は、実戦経験の無い新人とききたもんだ。

俺の悪運も、ここまでかね…

ビリーは、ボーっとそんなことを考えていた。

しかし、キーンに向かって叫んだ。

「おいキーン！シャトルへ向かえ！…ここは俺が引き受ける！」

「え？」

「いいから行け！頼んだぞ！」

「り、了解です!!」

ビリーに指示され、シャトルの方へ向かうキーン。

相手の動きを見ていたが、かなりの手練れであることが読み取れた。

ここまで生き残ってきた、おそらくジオン軍の特殊部隊か何かだろう。

敵MSも見たこともない型だ、新型機ってやつだろうか。

まさか、辺境の地”北極基地”がこれほどの戦力の襲撃を受けるなんてな。

ここで、キーンと相手の2機を相手にするのは非常に分が悪い。

自分がここで時間を稼ぎ、相手がここを突破した時は、キーンにシャトルを守ってもらうしか手は無いだろう。

それに、若い命を無駄に散らしてしまうことなんて、自分にはどう

しても出来ない。

「ロツジ…、俺もそろそろそつちへいくかもな…」

この世にはもういない友人の名を呟き、ビリーは自慢のバンダナを締め直した。

「は…早く、シャトルへ行かなきゃ…」

突然の事態に混乱し、キーンは今にも泣きそうになりながらシャトルへ向かっていた。

潜水艦ドックを抜け、長いエレベーターを降りると、シャトルが見えた。

シャトルでは、急ピッチでコンテナ搬入作業が進められている。

キーンはシャトルに近寄り、付近を警戒する。

どうやらここには敵は来ていないようだ。

ブラウン隊長たちがうまく戦っているのかもしれない。

ビリーさんは大丈夫だろうか。

…とその時、コックピットの警戒音が鳴った。

エレベーターの上部を見ると、潜水艦ドックを抜けた1機のゴッグタイプが姿を現した。

敵はシャトルがコンテナを積み込んでいるのを見つけると、すぐに装備しているロケット弾を構えた。

コンテナをシャトルもろとも撃破するつもりだ。

「させるかあ…！」

キーンはジムのマシンガンを敵に向かって放った。

ここで自分が逃げたら全てが水の泡だ。

シャトルは絶対に死守してやる！

敵はマシンガンの連射に怯み、建物に隠れる。

コンテナの搬入は完了し、シャトルは秒読みに入っている。

シャトルの近くにいるキーンは、このままではシャトルの噴射炎に巻き込まれてしまうが、そんなことは考える余裕も無く、マシンガン

を撃ち続ける。

敵も、シャトルを射出されたら作戦失敗である。

次の瞬間、敵のMSは強行し、マシンガンの雨の中、ロケット弾を構えた。

キーンは敵と正面から向き合う形となり、敵の行動に一瞬たじろいだが、正面からマシンガンを撃ち続けた。

マシンガンの弾はコックピットに命中し、敵は倒れた。

そのすぐ後、シャトルは射出された。

キーンのリムを巻き込みながら：

シャトルが飛び立ってから数時間後：

北極基地は多くの建物が破壊され、その傍らには、撃破されたMSが無常にも倒れている。

ジオン軍は、シャトル射出後、すぐに撤退を開始した。

撤退も早いところから察するに、やはりベテラン揃いだったのだろう。

多大な犠牲を払いながらも、ブラウン隊はシャトルを最後まで守り切った。

シャトル射出口には、1機のMSが横たわっている。

キーンの寒冷地仕様ジムだ。

シャトルの噴射に巻き込まれ、ボロボロになったジムのコックピットが開く。

キーンは生きていた。

青い空を見上げるキーン。

胸のポケットから煙草を取り出し、慣れた手つきで火をつける。

煙草をふかしながら、ポツリと呟いた。

「ガンダム…俺たちの無念を晴らしてくれよな…」

先ほどの戦闘が？だったかのように、空は清々しいほど晴れていた。

〈北極基地のブラウン隊 完〉